生活者とスタッフの人間集合からみた小規模多機能高齢者支援施設の 環境の読み解きに関する試論

－人間集合の形からみた高齢者支援施設の環境の在り方に関する研究（その1）－

A PRELIMINARY STUDY OF UNDERSTANDING THE SUPPORT ENVIRONMENT OF THE ELDERLY CARE FACILITIES FROM THE VIEWPOINT OF 'HUMAN GATHERING'

－ Study on the support environment of the elderly care facilities from the viewpoint of human gathering Part 1 －

菱田佳奈*, 松本真澄**, 上野 淳***

Kana HISHIDA, Masumi MATSUMOTO and Jun UENO

This paper aims to clarify the actual conditions of the environment of small-scale elderly care facility in which individualized care is provided. In this paper, we interpret the environment of elderly care facilities as 'a support environment' which is unified the architectural environment and the human resources environment of the care staff. And we define the human gathering composed by care staff and residents as 'the support gathering'. Then we proposed the method of describing the every scenes of living activity by this support gathering.

Data were collected from behavioral observations and examination of patterns in the use of space at the small-scale elderly care facility that has both Group Living and a Day Service. By defining "support gathering" such as Direct care, Conversation care, Organizing groups and Beholding, the authors clarified the actual situations of the support environment of small-scale elderly care facility.

Keywords : Multifunctional small-scale elderly care facilities, Support environment, Human gathering, Group living, Day service

小規模多機能高齢者支援施設, 支援環境, 人間集合, グループホーム, デイサービス

1. 研究の背景と問題意識

急速に高齢化が進む我が国では高齢化率が23%を超え（2010年）、既に高齢化社会を超えて超高齢社会へと移行している。我が国の高齢者支援福祉施策は、介護保険制度を柱に、訪問系・通所系・短期入所系・居住系など多段階のケア・サービスが組み合わされサポートが行われている（図1）。これらのうちのどの施設種別が重要・基幹的であり、どれが副次的であるかなどの重要度や区別が論じられる必要はないと考える。地域社会に多層的に張り巡らされるこれらのネットワークの中から、障碍や認知症を持ち支援を必要とする高齢者が個別のニーズによって利用する施設を選択できる体系を整えることが、今後の我が国の高齢者支援福祉施策にとって重要となるものと考えられる。

後述するように、建築計画研究の分野でも特別養護老人ホーム（以下:特養）、グループホーム（以下:GH）、デイサービス（以下:DS）などの施設種別にその生活者（居住者・利用者）の属性や生活様態・生活展開の実態を分析し、その計画・デザインの在り方について論じた研究は多くの深い蓄積をみるようになってきた。ただし筆者ら

の現在の見解では、これら幅広く存在する高齢者支援施設のそれぞれの特質を横断的に論じる視点が必要になってきていると考える。

また、これらの既往研究では生活者の生活様態や生活展開をそれぞれ独自の手法で記述しながら分析・考察を行っていると言えるが、こうした生活者の実態を捉える方法論にも更なる工夫や新しい手法に対する挑戦も続けられる余地があると感じている。

認定	自立	要支援	要介護
介護保険サービス（法定）	在宅サービス 訪問 通所 短期入所 入所サービス 居住系	利用不可	福祉用具貸与・特定福祉用具販売・住宅改修
			小規模多機能型居宅介護 訪問介護（ホームヘルプ）・訪問入浴介護 訪問看護・居宅介護（予防）支援 訪問リハビリテーション・居宅療養管理指導
			通所介護（デイサービス） 通所リハビリテーション（デイケア）
			短期入所生活介護（ショートステイ） 短期入所療養介護（ショートステイ） 注3）
			認知症対応型共同生活介護（グループホーム）注2）
		利用不可	介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム） 介護老人保健施設（老人保健施設） 介護療養型医療施設（療養病床等）

厚生労働省。介護保険制度改革の概要一介護保険法改正と介護報酬改正一（平成18年3月発行）より作成

図1 介護保険制度に基づく高齢者支援体系

* 東急不動産 修士(工学)

** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 助教

*** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域
教授・工博

Tokyu Land Corporation, M. Eng.

Assistant Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ.

Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

2. 既往研究と本研究の位置づけ

2.1. 高齢者支援施設における既往研究の概要

高齢者支援施設の計画研究については、その施設種別にこれまで多くの蓄積がなされてきた。その時代の制度・施策に対応した居住環境の基礎的調査にはじまり、その住環境や支援環境の質的向上を目指した研究が多くなされている。

特養についてみると、1990年代後半から2000年にかけては、その後制度化された小規模生活単位特養（ユニットケア）に通じる、個室化・生活単位の小規模化に向けた論文が数多く発表されている。橋¹⁾は、小規模処遇を意図し、段階的空間構成をもつ個室型特養3施設において、ケア環境の違いが入居者の生活に与える影響を明らかにし、小規模処遇においては semi-private 空間の質とケアのあり方が重要であることを示している。神吉ら²⁾はユニット内の共用空間である食堂・小上がり・廊下に着目し、行動観察調査によって利用実態を把握するとともに、入居者の滞在場所の割合、観察された具体的行為内容と回数、会話の回数比較から入居者相互の交流実態の把握を行っている。

環境の質を評価する研究では、住環境としての質的性能が求められる GH において多くの蓄積がある。厳ら^{3) 4)}は豊かな共用空間をもつ GH の空間利用について時系列的な調査を実施し、入居者の居室利用から「なじみ」のプロセスを読み解き、共用空間の利用状況について全体的傾向と個人的傾向の双方から詳細に考察を行っている。鈴木ら⁵⁾は GH における入居者の生活の再編過程について1施設を対象として時系列に考察し、入居者の生活関連行為数の増加から「生活の再編成」を読み解いている。鈴木ら^{6) 7)}は、物理的環境の異なる GH 2 施設を対象に、入居者の生活、スタッフのケアを比較し、空間構成の違いによる滞在場所の展開の違い、スタッフの動きの違いを分析している。また介護内容（直接介護・間接介護）に対する空間展開、自発的生活関連行為の頻度などからケア環境の質的側面について述べている。石井ら⁸⁾は、平面形態・運営形態に特色のある4つの GH を対象とし、その空間の利用のされ方と人間関係の形成実態を把握し、施設別にみた1日の流れと空間利用、滞在場所の構成割合、居室位置と着席滞り場所などから日本の GH の実態を示している。また比較分析として、石井ら⁹⁾はフィンランドの認知症・非認知症の GH を対象に比較分析を行い、空間利用の割合や移動頻度、居室の利用回数などの分析から、認知症高齢者はリビングを、非認知症高齢者は居室を生活拠点にしていることを示している。

2.2. 本研究の目的

こうした質の高い既往研究を参照しつつ、本研究は1.で述べた問題意識に基づき、以下の3点を目標として行うものとする。本研究全体の構成を図2に示し、これに従って本研究の目的を記す。

1) まず筆者らは、高齢者支援施設における環境の在り方を、生活者が住まい・滞在する物理的環境としての建築環境の在り方と、ここで生活者に対して日々刻々支援活動を行うスタッフによるサポート態勢としての人的環境の在り方、の2つが総合されたものと解釈し、これを「サポート環境」と呼ぶものとする。その上で、高齢者支援施設においてスタッフから支援をうけながら日々刻々展開される生活者の生活場面において、生活者とスタッフが形成する人間集合を後に詳述するように「サポート集合」と解釈し、この概念を用

図2 本研究の構成

いて刻々の生活場면을記述する方法を試論として提案する。

2) 小規模多機能高齢者支援施設を事例としてとりあげ、この「サポート集合」の概念を用いて1日の生活展開の様子を記述し、小規模多機能高齢者支援施設におけるサポート環境の特質について論じる。

3) 次に、この記述方法を小規模生活単位特養、GH、DS、いきがいDSなどの他の主要な高齢者支援施設に適用し、そこにおける「サポート集合」の展開の実態を丹念に記述することを試みる。これによって生活者の生活様態やスタッフの支援の在り方の特質を読み解き、比較検討を行うことから、各々の施設類型が高齢者支援について果たしている役割を横断的に論じる。

本研究の報告は2編に分けて行うことを予定しており、1)、2)を本編で、その後に3)を次編で報告することとしたい。

なお、本編は既発表論文1)～3)に大幅に加筆してとりまとめたものである。また、本編における「サポート集合」の基本的考え方は既発表論文4)に示しているが、ここでの考え方を更に精査し、観察調査の密度をあげると共に、分析にも更に多角的視点を取り入れて本編へと発展させた。

3. 調査の概要

3.1. 調査対象施設

調査対象とした小規模多機能高齢者支援施設^{注4)}の施設概要を表1に示す。また、平面概要は図5に示すとおりである。この調査対象は居住型支援施設GHと通所型支援施設DSの2機能が同一建物で一体に運営されている施設である。住宅に近いスケールの空間の中で、生活者（GH居住者・DS利用者）個々人の意思が尊重され、一方的に与えられる介護に依存するのではなく、時に家事や共同作業に生活者とスタッフが共に参加する共生の環境である。この意味でモデル的な小規模多機能支援施設と考え、調査対象として選択した。

3.2. 施設生活者の基本属性と1日の生活の流れ

調査対象施設の生活者の基本属性と1日の生活の流れの概要を図3に整理した。

GH居住者は9名^{注5)}で、平均年齢82.2歳、平均要介護度3.1であり、大半が自宅からの入居である。着衣・排泄に関して一部介助を要するものの日常生活動作の多くを自力で行うことができる。認知症レベルはI～IVではあるが、歩行に関してはほぼ全員が自立し

ており、その行動範囲・活動展開は施設全体に広がっていることが図3の諸室利用の様子から読みとれる。

DS利用者は登録15名で、平均年齢80.5歳、平均要介護度2.7であり、利用者の全員が送迎により通所している。着衣・排泄に関して一部介助を要するものの日常生活動作の多くを自力で行うことができる。認知症レベルはⅡ～Ⅳであり、歩行に関しては全員が自立している。日曜と水曜を除く週5日間の10時から16時の6時間が利用時間となっている。1日に6名前後が通所しスタッフ3名前後でサポートを提供する。

前述のように、対象施設はGHおよびDSの2機能を同一建物で運営しているため、DSのある日はGH居住者とDS利用者が空間全体を共有し、サポートも両者に対して区別なく一体的に行われている。

3.3. 調査の方法

対象施設における刻々のサポート集合の形成のされ方の実態を記述するために終日観察調査を実施した。図5はその記録の一場面であるが、こうした記録を9:00～16:00の間15分おきに、1日計29場面を採取した^{注6)}。調査はDSがないGH居住者のみの日2日間、DSがあってGH居住者とDS利用者が共存している日2日間の計4日間について行った。この刻々の記録採取では、その時々での生活者同士またはサポートスタッフと生活者が形成する人間集合の形、会話がスタッフと生活者の間で交わされる場合はその内容、スタッフによる生活者への視線による見守りの有無などに着目し行った^{注7)}。また、GH居住者とDS利用者の基本属性・生活様態・建物の使われ方などについて、GHおよびDSケアスタッフの各リーダーに事前アンケートおよび2時間程度のヒアリング調査を行った。

なお、こうした比較的重い認知症がある高齢者が生活する居住施設に外部者としての調査者が唐突に入り込むと、そのこと自体で生活者に動揺がおこり不必要な混乱をおこす懸念がある。この点を配慮して本研究では、調査者が生活者と馴染みの関係を構築し、且つそれぞれの生活者のパーソナリティを事前に把握しておくことを目的として、ボランティアスタッフとしてサポート活動に2か月間

(週1～2回程度)参加した後、本調査を実施した。

4. 「サポート集合」によるサポート環境の読み解き

4.1. サポート集合の定義と分類

ここでは、施設内における生活者とスタッフの居方の調査記録から、人間集合および本研究でいうサポート集合を認識し、これをスタッフの介在の仕方により分類する考え方について述べる。そのフローを図4に示し、この手順に従って考え方を記す。

(1) サポート集合の解釈と定義

図5は、ある調査日のある時間断面の生活者とスタッフの滞在場所とその居方を記録したものの一例である。ここでの生活者とスタッフの滞在所とその居方を考察すると、

- 他者の介在がなく生活者が単独である空間に居る場面
- スタッフが介在せず、複数の生活者がある空間に居合わせ、生活者同士がグループを形成するなど滞在している場面
- 1名の生活者が1名もしくは複数のスタッフにより介助されている場面
- 複数の生活者が1名もしくは複数のスタッフとグループを形

表1 調査対象施設の概要

施設名	グループホーム E (併設: デイサービス E)			
所在地	埼玉県新座市			
立地条件	住宅地に立地・病院施設に隣接			
事業主	NPO法人			
開設年月	2003年12月			
建築類型	併設型			
併設施設	デイサービス 居宅介護支援事業所			
建築形態	地階:RC造 木造2階建			
	グループホーム		併設 デイサービス	
提供サービス	24時間介護		デイサービス	
利用曜日	24時間365日		月曜～土曜(水曜除く)	
利用時間	24時間		10時～16時	
スタッフ構成	常勤:6名 非常勤:4名		常勤:3名 非常勤:5名	
生活者数	9名		15名	
1日平均利用者数	—		6.3名	
調査日概要	1日目	2日目	1日目	2日目
本調査日	2009.10.21	2009.10.28	2009.10.05	2009.10.19
調査時間	9:00～16:00	9:00～16:00	9:00～16:00	9:00～16:00
スタッフ数	5名	4名	8名	7名
生活者数	8名	8名	13名	13名

図3 施設生活者の基本属性と1日の生活の流れ

成して共に過ごしている場面

- e. 生活者は直接的なスタッフの介在なしに過ごしているが、スタッフがこの居方を見守っている場面

など、様々な様態があることに気づく。これらそれぞれb.～e.を本研究では「人間集合」の様々な様態として認識する。

以下の分析では、a.の生活者が単独で居る場合を含めてこれらすべての人間集合を記述分析していくが、これらの人間集合の中で、本研究では上述のc.～e.のようにスタッフが介在し、生活者と共に形成している人間集合を「サポート集合」と定義し、これを中心的な分析課題とする。

(2) サポート集合の分類

このサポート集合を、その時々に行われているケア内容やスタッフの関わり方の違いに着目して以下の4つに大きく分類し、行為内容により更に7つに細分化した(図6)。その定義を次に示す。

[A: 介助]: 食事・入浴・排泄・移動の誘導や介助など生活者の身体に直接触れて行うサポートによる生活者とスタッフの人間集合。

[B: 会話・声かけ]: 生活者との会話やスタッフ側からの声かけ(応答がない場合も含める)をこの分類とした。1名に対して行われる場合や2名以上に対して同時に行われる場合などがあり、その会話・声かけ内容により3つに細分した。

[B-1]: 部屋を移動、浴室への移動など、生活者の次の行動を誘導するきっかけとなる内容のもの

[B-2]: 精神的サポートのための会話。「大丈夫ですよ」「安心してください」など

[B-3]: [B-1] および [B-2] を除くすべての会話・声かけ。天気に関する会話、世間話などの日常会話が中心。

[C: グループ形成]: スタッフを含めて会話以外の何らかの活動や動作によりグループを形成する人間集合。具体的には、生活者とスタッフが共に食事をする、洗濯物を干す・畳む、テレビを共に観る、

一緒に歌を歌う、ゲームをする、趣味活動をするなど。なお、このグループのなかで会話が起きている場合、その会話の内容がグループ形成に関連するものであれば[C]に、その他の会話は[B]に分類した。

[D: 見守り]: スタッフは生活者に対し直接的な介在をしないが、生活者の存在を意識しつつ見守っている状態をこの分類とした。この場合、生活者がスタッフの視野に入っている場合とそうでない場合の2通りがあり、次のように細分化して捉えることにした。

[D] 見守り/視野に入る: 生活者は本人の意思で行動しその場所に滞在し、スタッフはそのサポートの対象である個人もしくは集団と直接関わりをもたないが視野に入る範囲で注意を払っていること、またその場面。

[D'] 見守り/視野に入らない: 同上で、視野には入らないが存在を意識しつつ気配を感じ、注意を払っていること、またその場面。

4. 2. サポート集合の抽出と記述

ここでは、終日観察調査で得られた生活者とスタッフの居方のマッピングデータからサポート集合を抽出し、これを記述していく方法について述べる。

(1) サポート集合の抽出

サポート集合のタイプの抽出フローを図7に示す。

図4 サポート集合の定義と考察のフロー

図5 生活者とスタッフの滞在場所とその居方の一例

タイプ	介助 A	会話・声かけ B-1	会話・声かけ B-2	会話・声かけ B-3	グループ形成 C	見守り D	見守り D'
ピクトグラム							
内容	食事・入浴・排泄介助・移動の誘導など直接身体に触れられるサポート	部屋を移動、浴室への移動など誘導のための会話	精神的サポートのための会話。「大丈夫ですよ」など	天気や体調など、B-1、B-2を除くすべての会話。日常会話	一緒に…歌う・寝る・食事・おやつ・将棋をする・TV観賞など	※「見守り」の定義…スタッフはその対象である個人もしくは集団と直接関わりを持たないが注意を払うこと、またその場面	

図6 サポート集合の類型とその定義

まずそれぞれの場所における生活者とスタッフの関わりの有無に着目する。スタッフが生活者に直接関わりを持っていないが、視線による見守りもしくは気配による見守りを行っている場合には、[D：見守り]に分類した。

直接関わりを持つ場合、その行為が生活者に直接触れて行われるものであれば、[A：介助]に分類した。直接触れるサポートではなく、一緒にゲームをする・歌うなどの活動により集合が形成されている場合は[C：グループ形成]に、会話によるサポートのみが行われる場合にはその会話の内容により[B-1][B-2][B-3]に細分した。なお、例えば1名のスタッフが2名の生活者に対して、一方には食事介助をもう一方には会話によるサポートを行っていた場合は、[A：介助]、[B：会話・声かけ]をそれぞれ出現したサポート集合とした。また、歌の会に参加し、生活者とスタッフによるグループが形成されている中での会話では、その会話内容が歌の会に参加しているための内容（例えば「次の歌は何ページですか？」など）は[C：グループ形成]として、グループ形成されている中でのそれ以外の会話（例えば「お風呂に行きましょう」など）は、[C]とは別に[B-1：会話・声かけ]のサポート集合が出現しているものと解釈した。

（２）サポート集合による生活展開の記述

終日観察調査より得られたマッピングデータの1場面を事例に、サポート集合の表記方法を示す。図8はある調査日の10：45の様子である。1階の居間・食堂ではGH居住者1名とDS利用者3名がスタッフの朗読する絵本を見ている（イ）[C：グループ形成]。脱衣室ではDS利用者1名がスタッフと入浴のための準備をしている（ロ）[A：介助]。2階の居室で、GH居住者2名は横になり（ハ）（ニ）[単独：サポート集合を形成していない]、もう1つの居室ではスタッフが「お仕事をし

ていたんですよね？」と声かけをしながらベッドに腰掛けている（ホ）。これは、抽出フローに基づき、[B-3：会話・声かけ]に分類した。2階居間では、お茶を入れているスタッフがGH居住者1名と会話をしている（ヘ）。この2名により形成されるサポート集合は[B-3：会話・声かけ]とした。

以上を、横軸に場所をとり、生活者とスタッフの滞在場所と人間集合およびサポート集合の出現を表記したものが図9である。どの部屋に何名の生活者とスタッフが滞在し、どのような人間集合およびサポート集合が形成されているかを記述している。なお、前述のように他者の介在がなく、生活者が単独で居る場面（上述の（ハ）（ニ））も同時に記録した。

以上のサポート集合の定義とその表記方法の設定に基づき、調査対象施設の1日の活動の様子を記述すると図10に示すようになる。ここでは施設内に居る全ての生活者とスタッフの滞在場所と各サポート集合に位置づけられている（またはいない）様子が15分おきに、個々人を特定しながら1日計29場面分表現されている。こうした記述を前述した調査日4日間について全て整理して、以降の分析に用いた。なお、図10はDSが実施され、GH居住者とDS利用者が同施設内に共存している日の状景である。

5. サポート集合における対人距離

全体的な分析に入る前に、ここでは各サポート集合が形成する対人距離についての考察を行っておく。

GH居住者のみの日の2日間に現れたすべてのサポート集合についてスタッフと居住者の距離を計測し^{注8)}、この平均値、最大・最小値、四分位値を表すと図11に示すようになる。

当然ながら、[A：介助]は距離が最も短く平均0.5m程度、[B：

図7 サポート集合の抽出フローチャート

図8 調査施設における生活展開の一断面（10月5日 10：45）

図9 生活者とスタッフの滞在場所とサポート集合の記述方法（10月5日 10：45）

図10 グループホーム居住者とデイサービス利用者の滞在場所とサポート集合の1日の生活展開の様子

会話・声かけ] が同 1 m 程度, [C:グループ形成] が同 3 m 以下, [D:見守り] が同 4 m, などとなっている. この距離の違いはそれぞれのサポート集合の特質をあらわしていると言えるが, 最も距離が長い [D:見守り] でも 4 m 内外の身近な距離でなされているところが, こうした住宅的な空間スケールでサポートが行われる小規模多機能高齢者支援施設の空間的特性であることが示唆される.

なお, 特養や介護保険下の D S など他の施設類型でこうした距離分析を行うと, それぞれのサポート環境の特質に応じてこのサポート集合毎の距離は異なってくるが, これについては次編にて詳述を予定している.

6. サポート集合からみたグループホームのサポート環境の特徴

ここではまず D S のない GH 居住者だけの生活日における場所別, 個人別にみたサポート集合の出現頻度などについて考察を行う.

6. 1. 場所別にみたサポート集合の出現頻度

GH 居住者のみの日の調査日 2 日間全 58 場面 (1 日で 15 分毎 29 場面×2 日間) において, 各サポート集合が出現した頻度を場所別に集計した結果を図 1 2 に示す. どの場所でもサポート集合が出現しており, 施設全体でサポートがなされていることがわかる.

2 階居室では [A:介助] が 11 回, [B:会話・声かけ] が 10 回と, 2 種類のケアが同程度なされていた. 居室での [C:グループ形成] も 4 回見られた. 居室という居住者の個人空間においても, 一緒に TV を見る, 洗濯物を畳む, などのグループ形成が見られることは, 居住者とスタッフの親密な関係があってこそ成り立つものであると言える.

2 階居間では [A] ~ [D] それぞれのサポート集合が形成されていたが, 特に [D:見守り] が 9 回と全体の 37.5% を占めている. この場所では居住者の共有の居場所として, スタッフが直接関与せず見守る場面が多いことがわかる.

2 階廊下で [B:会話・声かけ] が 10 回と頻度高く出現しているのは, スタッフが移動途中で居住者に声かけする他, 廊下にあるソファでスタッフが作業している場面に居室から出てきた居住者が傍に寄り添う形で会話によるサポートを受けていること, などに起因する. このことから, この施設における居室周りの廊下は単なる動線空間ではなく, サポート集合が出現する可能性を持っている場であることを示唆する. ソファや椅子などの設えが施されていること, またスタッフが事務作業する小空間を設けていること, などがサポートに有効な環境構成に寄与していると言える.

1 階ではサポート集合の多くは居間・食堂で形成されており, サポート集合全数の 25.5% と, サポート環境を考える上で重要な場所

となっていることがわかる. その内容は [B:会話・声かけ], [C:グループ形成], [D:見守り] が多く, また縁側においてもこれらの [B], [C], [D] がみられ, 居住者が自ら積極的に利用する場所となっている. これらの場所はスタッフの作業空間の配置との関係により居住者が居場所を選択しながらスタッフが見守れるような計画にすることが重要と考えられる.

施設外でのサポートは, 認知症特有の症状にあわせて, 居住者とともにスタッフが施設付近を散歩に行ったり, 買い物に出かけたりすることによるものであり, このようなサポートも共に暮らす施設としてのサポートの特徴の現れである.

図 1 2 場所別にみたサポート集合の出現頻度

図 1 3 個人別にみたサポート集合の出現頻度

図 1 1 サポート集合における対人距離分析

図 1 4 場所別にみたサポート集合の人数規模

図 15 居住者別にみた行為内容の内訳

図 16 居住者別にみた滞在場所の内訳

図 17 DSのある日とない日のGH居住者の行為内容内訳

図 18 DSのある日とない日のGH居住者の滞在場所内訳

以上のように場所別にサポート集合がどのように出現するかをみることで、それぞれの場所が居住者のサポートにどのように寄与しているかを読み解くことができる。

6. 2. 個人別にみたサポート集合の出現頻度

次に居住者個々人に注目し、各々がどのサポート集合に累積何回属していたかの頻度に関する分析を行う。図 10 の 2 階居室における [C : グループ形成] を例にとって抽出の方法を述べる。2 階居室での [C] は、サポート集合数では 10 : 15 および 10 : 30 の 2 回形成されていた (6. 1. の分析ではこれを 2 回と数える)。これを居住者個々人の観点に立つと、10:15 の場面では 2 名の居住者が [C] 集合に属し、10:30 の場面で居住者 2 名が [C] 集合に属しているため、個人別には累積 4 回の [C] サポートが出現したものと解釈する。以上を場所別に集計したものが図 13 である。

これによると個人別にみたサポート集合に属する頻度は 1 階の居間・食堂において最も多く発生し、全体の 33.2% を占める。2 階の居室のその数と比較すると約 2.6 倍となっており、居住者に対するサポートが行われる中心的な場所であることが理解される。この場所では主として、[C : グループ形成]、[D : 見守り] に属する頻度が高い。

属するサポート集合数は [A : 介助] が 43 回、[B : 会話・声かけ] は 47 回、[C : グループ形成] は 56 回、[D : 見守り] が 50 回とどの種類も同程度の回数が見られ、個人に着目すると多様なサポート集合が施設全体で同程度出現し、サポートがなされていると言える。

6. 3. サポート集合の人数規模と場所別出現頻度

以上を受け、ここでは各サポート集合が構成する人数規模について考察する。個人が属したサポート集合頻度数 (図 13) を出現したサポート集合数 (図 12) で除したものを、すなわち一つひとつのサポート集合が平均してどの程度の人数で構成されているかを場所別に集計したものを図 14 に示す。

[A : 介助]、[B : 会話・声かけ] とともにどの場所でも人数規模はほとんどが 1.0 を示し、このサポートがほぼマンツーマンでなされていることを意味している。

[C : グループ形成] についてみると、居室では集団規模が 1.0 であり、居住者 1 名に対してスタッフ 1 名のグループによるサポートが行われていることがわかる。2 階居間、1 階和室、居間・食堂、縁側では集団規模が 2.0 ～ 2.8 名となっており、このサポートはおおよそスタッフ 1 名に対して、居住者 2 ～ 3 名の小規模な単位で形成されていることがわかる。

[D : 見守り] は 2 ～ 3 名の規模で出現しており、2 階居間、1 階居間・食堂を中心にして、スタッフは直接居住者個々人に対峙するよりも、その場所にいる居住者数名に対して見守りを行っている様子が把握できる。

こうした考察を行うことにより、それぞれの場所でどのような内容のサポート集合がどの程度の人数規模で出現するかを把握できる。このような考察を積み重ねていくことにより高齢者支援施設の空間計画に一定の示唆を与えうると考える。

7. 生活者個人別にみた行為内容と滞在場所

7. 1. 居住者別にみた行為内容と滞在場所

ここではGH居住者の8名について個人がどのようなサポート集合にどの程度属していたかについての分析を行う。DSがなくGH居住者のみの日の終日観察調査2日間の15分毎計58場面の内、個人が[A]～[D]のサポート集合に属していた回数と属していなかった回数、後者では1)何らかの主体的な活動をしていた場面の回数と、2)無為または横になっていた回数、に分けて内訳を示したものが図15である。

サポート集合に属する割合は最も多い人で70%前後、最も少ない人で10%前後となった。自立度が低くサポート集合に属する頻度が高い居住者から、比較的自立度が高くサポート集合に属する頻度が低い居住者まで、その有り様は多様であることが示される。また、個人の属するサポート集合の種類は居住者の介助の必要性に応じてその内容は異なるが、[A:介助]や[C:グループ形成]、[D:見守り]が比較的多くの居住者にみられた。このように、個人がどのようなサポート集合にどの程度属していたかを分析することにより、どのような内容のサポートを必要とする人がどのような分布で存在する施設であるかを読み解くことができると考える。

次に、居住者別にみたその時々滞っていた場所の頻度内訳を図16に示す。すべての居住者にとって居室と1階の居間・食堂が滞在場所の中心となっているが、居室に滞在する割合が高い居住者から、1階に降りてきて過ごす時間の長い居住者まで、多様である。

7. 2. デイサービスの有無と行為内容と滞在場所

上述のGH居住者についての行為内容と滞在場所に関する考察について、DSがない日(すなわちGH居住者だけが居る日)とDSがある日(すなわちGH居住者とDS利用者が共存する日)とを比較検討する。

DSがない日2日間58場面×8名の計464場面(すなわち図15の8名分の合計)とDSがある2日間のGH居住者8名分の合計を集計すると図17に示ようになる。サポート集合に属する割合はGH居住者のみの日は、全体の42%、そのうち[A:介助]は43回(9%)、[B—3:日常会話]は17回(4%)、[C:グループ形成]は56回(12%)、[D:見守り]が50回(11%)となっている。DSのある日はサポート集合に属する割合が全体の46%と、わずかながらGH居住者がスタッフと関わりをもつ場面が多くなっている。またそのうち[A:介助]は33回(7%)、[B—3:日常会話]は36回(8%)、[C:グループ形成]は60回(13%)、[D:見守り]が56回(12%)である。[B:会話・声かけ]のなかでも日常会話が2倍に増え、DSのある日は、会話による声かけがGH居住者に対してもDSのない日より頻繁になされていることがわかる。またスタッフと関わることなく無為に過ごす場面がDSのない日とある日では128回(28%)と112回(24%)とわずかながらではあるが減少していることがわかる。

次に滞り場所についても同様に、居住者毎に得られた全58場面の滞り場所数を合計したもの(58場面×8名=464場面)をDSのない日とある日とで比較した(図18)。ここで2階の各場所の滞在数はほとんど変化が見られないが、1階の居間・食堂での滞在数が109回から147回と大幅に増えていることがわかる。このことより、GH居住者はDSのある日には積極的に1階の居間・食堂に滞在し

ていること、またそれがスタッフの誘導によるものではなく生活者自らが選択していること、などから無為の場面が減るといった行為の変化に結びついているものと解釈される。

8. まとめ

本研究では、高齢者支援施設における環境の在り方を建築環境と人的環境の在り方の2つが統合された「サポート環境」と解釈し、ここで展開される日々刻々の生活場面を生活者とスタッフが形成する「サポート集合」と解釈して記述する方法を提案した。この方法により個人の意思が尊重される生活者とスタッフの共生の場である小規模多機能高齢者支援施設のサポート環境の特質を読み解くことを試みた。

この結果、要約すると以下のような知見を導いた。

- 1) 住宅に近いスケールを持つ施設において、生活者はスタッフと共に家事に参加するなどして生活が営まれている。
- 2) その活動は施設全体に広がり、[A:介助]は度々なされるが、比較的小規模な[C:グループ形成]が頻繁に形成されることが小規模多機能高齢者支援施設のサポート環境の特質と言える。その集団規模は2～3名で、2階の居室、居間、1階の和室、居間・食堂、縁側など多様な場所で形成されている。
- 3) 1階居間・食堂と2階居間での[D:見守り]がしばしば見られ、これらの場所はスタッフが直接関わりをもたない生活者の居場所としての役割を果たし、見守りを中心としたサポートがなされる場所であると言える。
- 4) 集団形成は刻々変化しており、生活者の意思やスタッフの臨機応変に対応するサポートにより多様な場面が展開されている特徴がある。
- 5) GH居住者は、DSのある日には自主的に1階の居間・食堂に出てきて共に生活をしている兆候があり、またスタッフとの日常会話が増えている傾向もある。この結果、無為の場面が減る傾向があることを指摘した。

次稿ではこの分析手法を用いて、他の基幹的な高齢者支援施設である居住型支援施設2施設と通所型支援施設3施設の合計5施設について、サポート環境の特質を横断的に分析、体系的に把握していくこととしたい。

注

- 注1) 介護保険上の、要支援者を対象とした「介護予防サービス」と要介護者を対象とした「居宅サービス」の双方をまとめて『在宅サービス』と表記した。
- 注2) 2006年4月施行の介護保険で、グループホームはこれまでの居宅サービスから地域密着型サービスへと位置付けが変わったが実質的には「施設」におけるサービスであり、本研究では居住系入所サービスと位置付ける。
- 注3) 2006年4月施行の介護保険で、新たに導入された小規模多機能居宅介護は地域密着型サービスに位置づけられる。「通い」「宿泊」「訪問」といった高齢者の生活を連続的に支援する点から本研究では「在宅サービス」に位置づける。
- 注4) 調査対象とした支援施設は、居住型支援施設であるグループホーム(居住者9名)と通所型支援施設である小規模なデイサービス(一日の平均利用者数6名前後)が共存する。このため本研究では当該施設を「小規模多機能高齢者支援施設」と呼ぶこととする。なおこの施設は「小規模多機能型居宅介護」制度に準ずる施設ではない。
- 注5) グループホーム居住者の1名が本調査期間中入院していたため、基本属性に関しては9名、本調査でのデータ分析に関しては8名分について表記している。
- 注6) 調査時間帯を9:00～16:00とした理由は次の2点である。

①DS利用者とGH居住者が共存するこの施設ではDS利用者は概ね9:00過ぎに三々五々到着し、16:00前後に帰宅する。DSのない日はGH居住者のみの生活となるが、DSのある日とない日のGH居住者の生活展開の差異を考察することも本研究のねらいとしているので、この調査時間帯の設定とした。

②次編では、各施設種別毎のサポート集合の形成のされ方の比較検討を予定している。この際、介護保険下のDSや生きがいデイの通所型施設では主たる活動時間が9:00～16:00の間である。横断的に施設種別毎のサポート環境の比較検討を行うにはこの調査時間帯に揃えて考察するのが適切と考えた。

注7) 記録採取は、あらかじめ正確な実測によって作成した家具配置が記入されている平面図に、調査者がその時々生活者とスタッフの滞在位置や行為内容を描き込んでいく方法で行った。本施設は小さなスケールの空間で、対象となる生活者も最大で15名程度なので、本研究の調査員は1名である。ビデオ等での補助記録等は行っていないが、次編の調査対象である人数の多いDSなどでは調査員は2名であり、写真撮影で補助記録をした。なお15分毎のマッピング記録では、記録を採り始めてから記録を採り終わるまで概ね3分程度のタイムラグがあるが、図10では便宜上15分毎に揃えて記述している。

注8) 注7)に説明した生活者とスタッフの位置が描き込まれた図面データにより、生活者とスタッフの頭と頭の位置の距離を全て集計することで対人距離を算出した。概ね10cm程度の精度があると考えている。

注9) 終日観察調査は1日15分おき、9:00～16:00に実施したため29場面×2日＝58場面を採取した。

参考文献

- 1) 橘弘志：特別養護老人ホームのケア環境と入居者の生活展開の比較—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究—その3—，日本建築学会計画系論文集 第548号，pp137-144，2001.10
- 2) 神吉優美他：個別・ユニット型養護老人ホームにおけるユニット内共用空間の利用実態—個別・ユニット型養護老人ホームにおける入居者の空間利用実態（その1）—，日本建築学会計画系論文集 第592号，pp65-70，2005.06
- 3) 厳爽他：グループホームにおける空間利用の時系列的变化に関する考察—「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その1）—，日本建築学会計画系論文集 第523号，pp155-161，1999.9
- 4) 厳爽他：介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察—「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その2）—，日本建築学会計画系論文集 第528号，pp111-117，2000.2
- 5) 鈴木健二他：痴呆性高齢者グループホームにおける入居者の生活の再編過程—痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究（1）—，日本建築学会計画系論文集 第546号，pp121-126，2001.8
- 6) 鈴木健二他：痴呆性高齢者グループホームにおける空間の構成と入居者の生活・スタッフのケアの展開—痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究（3）—，日本建築学会計画系論文集 第556号，pp169-176，2002.6
- 7) 鈴木健二他：痴呆性高齢者グループホームにおけるスタッフの空間利用とケアの質的特性—痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究（4）—，日本建築学会計画系論文集 第563号，pp163-170，2003.1
- 8) 石井敏他：グループホームにおける生活構成と空間利用の特性—痴呆性老人の環境構築に関する研究—，日本建築学会計画系論文集 第502号，pp103-110，1997.12
- 9) 石井敏他：痴呆性高齢者のグループホームにおける空間利用の特性—フィンランドの痴呆・非痴呆グループホームにおける比較分析を通して—，日本建築学会計画系論文集 第537号，pp93-99，2000.11

既発表論文

- * 1) 菱田佳奈・上野淳・松本真澄：小規模高齢者支援施設における人間集合の形からみたサポート環境の在り方に関する考察：日本建築学会大会学術講演梗概集・E-1分冊，pp381-382：2008.09.
- * 2) 杉田淳志・菱田佳奈・松本真澄・上野淳：居住型および通所型高齢者支援施設のサポート環境—高齢者支援施設におけるサポート環境の在り方に関する研究（1）：日本建築学会大会学術講演梗概集，E-1分冊，pp.171-172：2010.09
- * 3) 菱田佳奈・杉田淳志・松本真澄・上野淳：人間集合の形からみる高齢者支援施設のサポート環境—高齢者支援施設におけるサポート環境の在り方に関する研究（2）：日本建築学会大会学術講演梗概集・E-1分冊，pp173-174：2010.09.

* 4) Kana Hishida, Masumi Matsumoto and Jun Ueno: Types of Human Gathering in Small-scale Elderly Care Facility: Journal of Asian Architecture and Building Engineering, Vol. 9 (2010), No. 2, pp415-421: Release Date: November 15, 2010

(2011年5月8日原稿受理，2011年11月2日採用決定)